

ホイットマンと19世紀ニューヨークの労働者たち

木 全 滋

Walt Whitmanが詩の主題としてしばしば労働者を取り上げたことはよく知られているところだが、彼が働く人々を詩に描いたり、ジャーナリスティックな文章で論評を行ったりする時、そこに提示される労働者像、あるいは労働者に関する彼の考えにはある種のあいまいさ、あるいは二重性があるように感じられる。そうした二重性が生じた理由についてはいろいろな考え方があろうが、本稿では過去の、あるいはまさに消えつつある、しかし詩人が働く者の理想の姿とみなした労働者のイメージと、彼が実際に目撃した新しいタイプの働く若者たちの姿、この2つのものが共に彼の夢が具現化した姿としてその詩に共存していることを指摘する。

I

たとえば次の詩 (“I Hear America Singing”) を考えてみよう。

I Hear America singing, the varied carols I hear,
Those of mechanics, each one singing his as it should be blithe and strong,
The carpenter singing his as he measures his plank or beam,
The mason singing his as he makes ready for work, or leaves off work,
The boatman singing what belongs to him in his boat, the deckhand singing
on the steamboat deck,
The shoemaker singing as he sits on his bench, the hatter singing as he stands,
The wood-cutter's song, the ploughboy's on his way in the morning, or at
noon intermission or at sundown,
The delicious singing of the mother, or of the young wife at work, or of the

girl sewing or washing,
Each singing what belongs to him or her and to none else,
The day what belongs to the day—at night the party of young fellows,
robust, friendly,
Singing with open mouths their strong melodious songs.
(*Walt Whitman: Poetry and Prose*, 174. 以後Wと略記)

明るく力強い詩ではあるが、現代の読者の観点からすれば、あまりにナイーブで、楽天的かつ凡庸なアメリカ賛歌にすぎないと受取られてもしかたがないかもしれない。しかし、もう一度注意深く読んで、ここで歌われている職業に注目してみよう。2行目にある“mechanics”は、岩波文庫版『草の葉』(*Leaves of Grass*)では、「工場労働者たち」となっているが、これは「(手仕事)職人」と取った方が、後続する詩行との関係でよいのではなかろうか。この“mechanics”に限らず、この詩に歌われた職業はすべて、大工、石工、製靴工など、個人の技量の高さによって生計を支えることを基本とする、日本で言う職人ばかりである。そのような職業が選ばれているのにはそれなりの意味があるのだ。

他にもホイットマンの詩には、職業の名称を書き写すことそのものが目的なのではないかと思わせるようなところがある。たとえば“Song of Myself”のセクション15や“A Song for Occupations”のセクション5では、数十行に亘って次々と職業の種類が連ねられている。ホイットマンの詩の特徴の一つとして指摘される表現法で、しばしばカタログ技法と呼ばれるものだ。興味深いのは“A Song for Occupations”では、版によってカタログに列挙される業種にも異同があることだ。特に1867年の第4版以降職種的大幅な削除と入れ替えが行われ、55年の初版、56年の第2版、60年の第3版のテキストとはまったく異なったものとなっている。アメリカ産業の工業化が職業のカタログに反映されているのだ。しかし全体として見れば、これらのカタログもまた、“I Hear America Singing”同様個人の鍛えられた技量や忍耐強く行わなければならない手仕事を称えるものとなっている。カタログが始まる直前の“Song of Myself”12には、より具体的に、職人技に対する詩人の興味と尊敬を表わした

The butcher-boy puts off his killing-clothes, or sharpens his knife
at the stall in the market,

I loiter enjoying his repartee and his shuffle and break-down.

Blacksmiths with grimed and hairy chests environ the anvil,

Each has his main-sledge, they are all out, there is a great heat in the fire.

From the cinder-strew'd threshold I follow their movements,

The lithe sheer of their waists plays even with their massive arms,

Overhand the hammers swing, overhand so slow, overhand so sure,

They do not hasten, each man hits in his place. (W, 198)

のような描写が見える。肉屋 (butcher, 現代の「肉屋」のイメージとは違い、肉の販売を行うだけでなく、屠殺、解体を専門とする職人の面を持つ) の少年の楽しげな仕事ぶりにも、鍛冶屋たちのチームワークのすばらしさにも共に詩人によって最高の賛辞が与えられている。

ホイットマンが様々な職業を詩に取り込む時、その目指すところは工場の労働者のような、大きなシステムの一員として、その歯車の一つとして働くのではない、誇り高い職人たちをアメリカ市民の理想像として提示することだと考えられる。ちょうどアメリカ建国時代を指導したThomas Jeffersonが、工業製品は墮落した旧世界たるヨーロッパからすべて輸入し、狭いながらも自前の土地を持った自営農民が育てた農産物を輸出して外貨を獲得するという農本主義立国として新しい共和国を少なくとも最初は構想していたように、ホイットマンも自立した職人たちの共和国としてのアメリカを夢想していたのではないか。 *The Eighteenth Presidency!* において、その理想をホイットマンは散文で次のように表現していた。これは詩人の想像力によって捉えられた、究極の労働者自主管理の夢ということになる。

I expect to see the day when the like of the present personnel of the

governments, federal, state, municipal, military, and naval, will be looked upon with derision, and when qualified mechanics and young men will reach Congress and other official stations, sent in their working costumes, fresh from their benches and tools, and returning to them again with dignity. (W, 1332)

ジェファースンの農本主義立国論は現実には実現不可能なヴィジョンであり、実際に19世紀にアメリカが辿ったのは大産業国家としての発展の道であった。では、ホイットマンによる職人たちの共同体は、いかにも文学者らしい、現実の状況から切り離された空想に過ぎなかったのだろうか。確かに、“I Hear America Singing”が書かれた1860年においてはそうだったろう。しかし、過去のある時点において、むしろ完全なユートピアといったものではなかったけれども、それは現実のアメリカに存在していたのだと歴史家たちは主張する。

Carroll Smith-Rosenbergによれば、1740年代から1830年代のアメリカは、職人たちにとっての黄金時代であった。ものの製造・加工の中心は家庭の作業場であり、家族のひとりひとりが、数人の徒弟や、徒弟期間を終えた職人とともに働いた。徒弟や職人は家族と寝食をともにし、同じ教会に通い、親方は彼らに仕事の技を教えるだけでなく、教育の責任も負った。冬の夜には、親方が徒弟たちと政治、経済、道徳に関する小冊子を一緒に読むこともあったろうと、スミス・ローゼンバーグは書く(83)。

また、Sean Wilentzは18世紀末から19世紀中葉にかけてのニューヨークの労働者階級の変遷を描いた著書の第2章で「職人共和主義」(Artisan Republicanism)について語っている。そこでは、独立革命直前の危機の時代から1820年代末までのニューヨークを主な舞台として、職人たちの政治的影響力の形成過程が詳しく描かれる。そこで提示されるのはよりリアルな権力闘争の姿であり、職人階級の力（特に彼らが持っている票）を自らの道具として使おうと考える人々も現れる。しかし、職人たちにも一定の政治的発言力があったことは事実であり、生産的職人の高貴さへの言及は、職人たちの政治的レトリックの中心的役割をはたしていたのだった(71)。なかでも印象深いエピソード

ドは次のようなものだ。

1830年、イギリスからニューヨークにやって来た移民労働者John Petheramは、この街では職人の共和主義的感情が非常に強く、仕事場の組織のあり方まで決めてしまうことを知った。彼はある時、1人の老人に、イギリスでそうしているように労働を分業にすれば、もっとたくさん仕事ができると説こうとした。ペザラムによれば、この老人はAdam Smithを読んだこともないようだった。ところが腹を立てたこの老人はペザラムに、「ここは自由の国ですぜ」と言い放ち、この国では分業の結果、人が人の上に立つようなことは望まないのだと答えたのだという(62)。

ホイットマンの少年時代にはかろうじて残っていたかもしれない職人共和主義に基づく社会は、産業革命とそれに伴う産業構造の変化による社会の激変のなかで解体し消えていく運命にあった。職人たちは賃金労働者となり、小親方たちも、工場経営者になることのできた少数を除いて同様の道をたどった。“Song of Myself”42の次の一節もまた、暗い経済的变化の影響力を暗示しているのであろう。

Many sweating, ploughing, thrashing, and then the chaff for payment
receiving,

A few idly owning, and they the wheat continually claiming. (W, 235)

II

しかし詩人は、誇り高い職人たちの世界が崩壊しつつあった時期に、もう一つ別の形の連帯の姿をアメリカの都市のなかに見出していた模様である。それは職場でも政治の舞台でもない場所に新たに生まれた、家族から遠く離れて都会に集まってきた若者たちの仲間集団(peer group)である。これまで存在したどの社会集団にも似ていない新しいタイプの集団が誕生したのは、産業革命とそれに伴う産業構造の変化が主要な原因であった。その経緯は大体以下のようなものである。

18世紀末から進行していた商業と交通・運搬の革命によって、ニューイング

ランドの農村は徐々に疲弊してゆき、19世紀初頭には大量の若者たちがニューヨークなどの都市へと流入するようになった。この人口の大移動には、歴史家によれば1810～30年代と1850年代の二つの波があった。ホイットマンは少年時代から青年時代にかけて、この第一の波を目撃したことになる。若者たちは、この経済的圧力によって家族や村落共同体の絆から切り離され、都市へと引きつけられていった。父母の土地を去って都会に来た彼らは、男性であれば職人や商店の店員、女性であれば紡績工などの工員や召使いなどとして働くことになった。

彼らを迎え入れる都市の側も、この大規模な人口移動によって変化せずにはいられなかった。たとえば都市に店を構える商店の場合、18世紀においては、新しい店員は縁故採用されるのが普通のことであった。互いによく知っている間柄の人物から推薦される新人は安心して採用することができた。彼らは新人店員から商売のパートナーとなり、結婚を通してその商店の経営者の一員として迎え入れられることもしばしばあった。

だが、そのような慣習は19世紀にはまったく変ってしまった。アメリカ経済の発展とともにビジネスの規模が大きくなり、必要な従業員の数が増大すると同時に、都会に押し寄せた大量の若者たちを新規採用の対象とするようになり、店員たちはもはや商売のパートナーや家族の一部とはみなされなくなった。彼らの多くは都市の生活にも商売のやり方にも慣れておらず、就職した商店やその主人にどれほどの忠誠心を持っているかもはっきりしなかった (Smith-Rosenberg, 79-81)。

新人採用をめぐる19世紀の事情を髣髴とさせる興味深いエピソードとして、次のような記録も残っている。

Apprentice Wanted. - Four able bodied young men, from sixteen to eighteen years of age, can have an opportunity, by applying to the subscriber, of learning the art of Moulding in Sand for Iron Castings. . . . They must pass a phrenological examination, and be approved by Messrs. Fowler and Wells, 131 Nassau Street, N.Y. . . . (cited in Horlick, 216)

すなわち、採用試験がなかった当時、商店が採用希望者に当時大流行していた疑似科学である骨相学の診断書を履歴書とともに提出させていたケースがあったというのである。頭蓋骨の形から、脳のどの部分が発達しているかを診断し、人の能力や性格の特徴を類推する骨相学は19世紀前半から半ば過ぎまでアメリカで大流行を見ていた。もし骨相学の診断が正確なら（そして当時の人々はそれを真正の科学と見なしていたのだが）、縁もゆかりもない赤の他人であっても、的確に応募者の能力や性格を掴んで採否の決定ができるというわけである。¹

こうして、かつては就職先の商店などで主人の家族と寝食をともにしていた若い店員たちは、安いホテルや下宿屋に住み、レストランで外食をするようになった。このような若者たちの出現は都市に根を下ろして長年暮してきた人々にとっては不安の種になる不気味な現象と映っていたらしい。しかし、彼らは故郷から遠く離れた土地で独自の文化を築き始めた。なかでもホイットマンのみならず多くの人々の関心を引いた（それゆえに彼らに対する反応が文字記録として残っている）のが、ニューヨークのバワリー地区(The Bowery)とそこに住む若者たちだった。

彼らの風俗・習慣は20世紀になって次々に登場するユース・カルチャーの先駆とも言えるものだった。David S. Reynoldsは、ホイットマンと関係が深いにもかかわらず、これまで研究者がほとんど言及してこなかった政治家、Mike Walshの重要性について述べた後、バワリー地区に住み、ウォルシュを自分たちのリーダーとして崇拜した一群の若者たちも、ホイットマンの詩に影響を与えたと書いている(102-103)。

先にウォルシュについて一言しておく、彼の政敵に対する極端に攻撃的な言辞のレトリックはホイットマンの詩や散文の語法と極めて似ている部分があり、ウォルシュの詩人への影響は考えられないことではない。もっとも、この時代のニューヨークの政治家たちの言葉の使い方が、全般的に現代のわれわれには想像もできないような荒々しさを持っていたことを考えれば、ホイットマンの語法の特徴をウォルシュだけに帰することはできないのではないか。

ともあれ、ここではしばしばバワリー・ボーイズと呼ばれたバワリー地区の

若者たちとホイットマンとの関連に焦点を絞りたい。Christine Stansellは、1830年代にマンハッタン島の西側に位置するバワリーに若い労働者たちが集うようになり、バワリーは、東のブロードウェイに対して、独特の雰囲気を持った、いわば庶民のブロードウェイのような存在としてその名を知られ始めるようになったと書いている。安い買い物ができ、様々な庶民の娯楽施設も充実していたそこは、ニューヨークの労働者階級の人々がしばしば足を運んだ場所であった。特に週末の夕方から夜にかけては、ダンスホール、オイスターバー、バワリー劇場などに若い男女が出会いや愉快的な時間を求めて繰り出した(89)。18世紀の終りに登場した時にはまだ高価なものであったアイスクリームも、この頃にはデートをする彼らにも手の届くものになっていたという(92)。

そして、1840年代の初めには、バワリー・ボーイズと呼ばれる都会の若者の1つのタイプが登場した。スタンセルによれば、彼らは30年代の労働者たちによるボランティアの消防団、fire laddie から生まれてきたものである(90)。19世紀アメリカの風俗の記録者で、スタンセルもしばしば引用しているAbram C. Daytonは、彼らのほとんどはたくましい職人たちで、仕事が終わると、現代で言えば消防車の車庫にあたる場所（“the engine house”）に集まり、火事時にはただちに出動できるよう準備をしながら、仲間との会話に興じていたと回想している(215)。バワリー・ボーイズは、fire laddieのなかでかなりの勢力を占めているグループで、勇敢で気前がよく、驚くほど粗野で乱暴な話し方をすることで知られていたが、何よりも特徴的だったのは彼らのファッションだったようだ。たとえばその髪型について、デイトンは以下のように書き残している。

The hair of the b'hoys or fire-laddie was one of his chief cares, and from appearance the engrossing object of his solicitude. At the back of the head it was cropped as close as scissors could cut; while the front locks, permitted to grow to considerable length, were matted by a lavish application of bear's grease, the ends tucked under so as to form a roll, and brushed until they shone like glass bottles.(217)

彼らは、本稿の I で述べた働く男たちの職場や経験、あるいは同じエスニック・グループのなかでの活動などとは直接関係のない出自を持っている。むしろ労働が終った後の自由時間をどう過ごすかによって自らを規定しているのである。本稿の最初に引用した、“I Hear America Singing”の最後から2行目にあった“at night the party of young fellows, robust, friendly,”という描写は、まさに彼らのことを言っていたのではなかろうか。

スタンセルはこのバワリー・ボーイズのパートナーである女性たち(“Bowery girls”または“Gals”)に特に注目している。彼女たちのファッションは、ブロードウェイで目撃することができる“lady”たちのシックで上品な装いに対する意識的な逸脱だった。当時の上流階級の女性たちはできる限り肌を隠すようにしていて、特に帽子と手袋は彼女たちを象徴するものだった。素材の色は、上品なパステル、グレイ、ブラウンが中心だった。それに対して、バワリー・ガールズのスタイルはこの地域が生み出した若者文化の刻印をはっきりと押された独自のものであった。パラソルを持ち、明るいピンクと濃い青、明るい黄とより明るい赤、緑と紫など奇抜な色の組み合わせの服を着た彼女たちは、体を揺らすような歩き方も独特だった(Stansell, 93-94)。デイトンはその様子を以下のように描写している。

The b'hoys' female friend, whether wife, sister, or sweetheart, was as odd and eccentric as her curious protector. Her style of attire was a cheap but always greatly exaggerated copy of the prevailing Broadway mode; . . . but her gait and swing were studied imitations of her lord and master, and she tripped by the side of her beau ideal with an air which plainly said, “I know no fear and ask no favor.”(218-219)

昼間は、工場労働者、店員、婦人帽作りの職人、仕立屋、地図着色の職人、お針子などとして働く彼女たちは、土曜になると先に触れたようなカラフルな服装で街へと出かけてゆくのだった。

本稿の I でふれた職場を中心とした共同体は、働く男同士の絆を核として緊

密に編み上げられており、女性嫌悪(misogyny)的な姿勢をあらわに示していた。また、スタンセルによれば、この時期にニューヨークではゲイのサブカルチャーがかすかにその姿を現しかけており、ホイットマンはそれに属していた。それらに対して、バワリー文化の基調はヘテロセクシュアルなものであった。バワリーとて、男らしさを過度に重視する家父長制的雰囲気が残存する世界ではあったが、“Gal”たちは、バワリー・ボーイズの相棒、仲間であり、たとえ相対的に小さいものであったにしても、共和国の労働者としての誇りを分け持つ存在たりえたとスタンセルは主張している(90-92)。

ホイットマンは彼らに強い興味を持っていた。ジャーナリスト時代に何度かバワリー・ボーイズに言及し、彼らの生態を捉えた長い記事も1つ書いている(Reynolds, 103-104)。また、生前は出版されなかったアメリカの言葉をめぐるエッセイ、“The Primer of Words”には以下のような一節もある。

... - the splendid and rugged characters that are forming among these states, or are already formed, - in the cities, the firemen of Mannahatta, and the target excursionist, and Bowery boy - the Boston truck man - the Philadelphia - (*Daybooks and Notebooks*, III: 736)

レイノルズは、詩人としてのホイットマンの目標の1つは、バワリー・ボーイズの活力を捉えることであり、*Leaves of Grass*の語り手の性格はバワリー・ボーイズの特徴を反映していると主張する(105)。彼がその一例としてあげているのは“Song of Myself”の47である。

The boy I love, the same becomes a man not through derived power,
but in his own right,
Wicked rather than virtuous out of conformity or fear,
Fond of his sweetheart, relishing well his steak,
Unrequited love or a slight cutting him worse than sharp steel cuts,
First-rate to ride, to fight, to hit the bull's eye, to sail a skiff, to sing

a song or play on the banjo,
Preferring scars and the beard and faces pitted with small-pox over
all latherers,
And those well-tann'd to those that keep out of the sun. (W, 242-243)

引用の前後をよく読めばここで詩人は、読者に対してあたかも年長の助言者であるかのような語り口を用いていることがわかる。これは、語り手が読者に語りかけ、励まし、説得するという「ほく自身の歌」に特徴的な形式ゆえの表現であり、カタログ的に並べられる資質は詩の語り手が読者に求めるものであって、これらの資質を語り手と同一視するかのようなレイノルズの解釈に、完全には首肯しがたい。ただ、レイノルズが、ホイットマンは文学のバワリー・ボーイだという19世紀終り頃のある文芸評論家の言葉を示しているように(105)、ホイットマンの同時代人のなかに彼をあたかもバワリー・ボーイズの代弁者のように捉えていた者がいたことは否定できない。

バワリー・ボーイズはグループ間での抗争でも知られていたが、彼ら以上に暴力的で悪評が高かったのが“rough,” “rowdy”等と呼ばれた若者たちであった。彼らは実質的にはストリート・ギャングと言っていい。ホイットマンは時として彼らと同一視さえされたようだ。レイノルズは、東部の「上品な伝統」を代表する詩人、James Russell Lowellが、“Whitman is a rowdy, a New York tough, a loafer, a frequenter of low places, a friend of cab drivers!”とまで書いていたことを指摘している(cited in Reynolds, 106)。また、ホイットマンは“A Leaf for Hand in Hand”というタイトルの次のような詩も書いていて、これを文字通り受取るならば詩人は彼らにも強い共感を抱いていたことになる。

A leaf for hand in hand;
You natural persons old and young!
You on the Mississippi and on all the branches and bayous of the Mississippi!
You friendly boatmen and mechanics! you roughs!
You twain! and all processions moving along the streets!

I wish to infuse myself among you till I see it common for you to walk hand
in hand. (W, 283-284)

しかし実際には新聞等でホイットマンは彼らの行動を、都市の秩序を乱し、市民生活の平和を破るものとして強く批判しているし、その批判は40年代から50年代へと年を追うにつれて激しさを増していつている(Reynolds, 105-106)。上の詩では、“roughs”は、ホイットマンの詩における本来のヒーローである“mechanics”らとともに詩人に呼びかけられているが、“natural”で“friendly”な彼らと並置されることで、詩的に昇華され、友愛と団結の象徴と化しているのである。

カラムス詩群の別の詩、“We Two Boys Together Clinging”は“*We two boys together clinging, / One the other never leaving, / Up and down the roads going, North and South excursions making,*” (W, 282)と始まり、わずか9行のなかで現在分詞を25回も繰り返すという特徴ある詩だが、ここに出てくる2人の少年も“roughs”なのかもしれない。なぜなら彼らは舟を走らせたり、水を飲んだり、ダンスをしたりする他に盗んだり、脅迫したり、法律を嘲弄したり、都市を略奪したりもするらしいからだ。しかし、その標的として挙げられているのは“misers”や“menials”や“priests”のような、当時のアメリカにおいて、既得権にしがみついたり、不当な富や権力を享受しているような人々ばかりである。結局ここでの2人の少年は、古い体制に挑戦し、今までにないタイプの連帯を求める新しいアメリカ人の比喩に過ぎないと見るべきであろう。だからこそ、彼らの具体的な行為だけでなく、「安楽を軽蔑し」(ease scorning)、「柔弱さを狩り出し」(feebleness chasing)などの理念的な言葉も付け加えられているのだ。バワリー・ボーイズに関しても、実際にバワリー地区に足繁く通ったホイットマンであったから、彼らの愛すべき性格を自らの目で確認し、それを大いに認めていたことは事実であったろうが、詩人はその想像の世界で当時の若者たちの活力、アメリカの古い体質に反逆するその姿勢などの美質を増幅してテキストに表したのであって、現実の彼らを全面肯定し、その行動をすべて支持していたわけではなかった。

では、詩人が彼らに仮託したものとは何だったのであろうか。先に引いたスタンセルの研究が明らかにした、家族からも古くからの村落共同体からも切り離された彼らが育んだ仲間同士の結びつき、そこにホイットマンは自らの理想に近いものを見て取ったのではないだろうか。カラマス詩群の詩の1篇、“Whoever You Are Holding Me Now in Hand”で、詩人は“The whole past theory of your life and all conformity to the lives around you would have to be abandon’d,” (W, 270)と、自分の友人になるためには、その前に過去のすべての絆を捨てて来なければならないと訴えていたのではなかったか。

また、同じくカラマス詩群の“Among the Multitude”では、ホイットマンは

Among the men and women the multitude,
 I perceive one picking me out by secret and divine signs,
 Acknowledging none else, not parent, wife, husband, brother, child,
 any nearer than I am,
 Some are baffled, but that one is not—that one knows me. (W, 286)

と歌ったが、ここでも都会は、古い村落共同体では起こりえない出会いの可能性を秘めた場と考えられ、“secret and divine signs”に導かれて出会った仲間の価値が、親や兄弟との関係よりも上位に置かれている。

ホイットマンがバワリー・ボーイズやこの地区独自の文化に興味を抱いた理由は、まさしくこの自由な連帯の可能性だったのではあるまいか。19世紀の都市なればこそ生まれたこの新しい人間の結びつきのあり方に、彼は自らの夢に近い何ものかを見出したのだった。

働く者たちの職場での連帯もバワリー・ボーイズたちの自由な交流もホイットマンを引き付けるものを持っていた。前者への尊敬も後者の自由への共感もホイットマンの労働者像の重要な構成要素となっている。しかしその後、南北戦争という巨大で深刻な破局が詩人の意識から他のすべての出来事を押しつけてしまう時がやって来る。詩人の関心はもっぱら南北戦争、南部と北部の分裂

回避の必要性、戦場で戦う男たちの絆、特に若くして死んでゆかねばならない少年兵たちの運命に向かう。戦争と再建時代が終わった時、ホイットマンは、*Democratic Vistas*に見られるように、現実のアメリカに対する苦々しい認識を表白すると同時に、観念的にアメリカの理想を語る人物に変わっていた。誇り高い職人たちの世界であれ、バワリーの若者たちの世界であれ、現実にアメリカに存在した連帯の形は、詩人のテクストのなかでは懐かしい思い出として時折言及されるだけのものとなっていたのである。

註

- 1 ホイットマンと骨相学、ファウラー兄弟との関係については、木全「ホイットマンと骨相学」、『ホイットマンと19世紀アメリカ』。119-139を参照されたい。

Works Cited

- Dayton, Abram C. *Last Days of Knickerbocker Life in New York (Illustrated Edition)*. New York: G. P. Putnam's Sons, 1897.
- Horlick, Allan Stanley. *Country Boys and Merchant Princes: The Social Control of Young Men in New York*. Lewisburg: Bucknell UP, 1975.
- 木全滋. 「ホイットマンと骨相学」. 『ホイットマンと19世紀アメリカ』. 吉崎邦子、溝口健二編. 東京：開文社, 2005.
- Reynolds, David S. *Walt Whitman's America: A Cultural Biography*. New York: Knopf, 1995.
- Smith-Rosenberg, Carroll. *Disorderly Conduct: Visions of Gender in Victorian America*. New York: Oxford UP, 1986.
- Stansell, Christine. *City of Women: Sex and Class in New York 1789-1860*. Urbana: U of Illinois Press, 1987.
- Whitman, Walt. *Walt Whitman: Poetry and Prose (College Edition)*. New York: The Library of America, 1996.
- . *Daybooks and Notebooks*. Ed. William White. 3 vols. New York: New York UP, 1978.
- . 『草の葉』（上・中・下）. 酒本雅之訳. 東京：岩波書店. 1998.
- Wilentz, Sean. *Chants Democratic: New York City & the Rise of the American Working Class, 1788-1850*. New York: Oxford UP, 1986.
- . 『民衆支配の讃歌』（上・下）. 安武秀岳監訳／鵜月裕典・森脇由美子共訳. 東京：木鐸社. 2001.